



夕刊
行發日二十月十
（日）（日）（日）（日）（日）

踊子悲歌

藤尾 頑亮

だが涙は受取らうとも
を殺風景な空に落し込
んだのであつた
「え、ちや待って、ね、妾
仕度をして来るア」
ハイヒールの靴音も軽く
ルミは控室に入つて行つた
暫らして、黒づくめの
洋装に包まれたルミと護次
は、にぎやかなバンドの伴
奏に送られて消えて行つた
街の灯の中へ消えて行つた
「何に――」
「本當に、その青年がルミ
は好きだと云ふ事が判つた
りしたんだね」
「え、それもあるけど――」
「さうかいせめてもの想ひ
消した」
×月×日横濱午前十一時

新 歌 壇

新妻 久満夫 選

「秋思抄」 加藤 純 弘
朝の雨を降して水戸の花ははちぢる散り
て去しき
短かき生命を生きて芝草に絶へて鳴ける
蟲は愛憐し
雨霽れ空を雲飛ぶ寒き日にグリの花は萎
れて伏したり
コスモスの花は咲き初め寒き雨に揺れてそよ
げり細きその葉は
枝揺する風強くして柿の熟れおびたしくも
落ちつづれたり
小評「朝の雨を降して」の歌は素直な表現である。「短
かき」の歌の結句は反つて首の破壊性を弱めてし
まつて、惜しい事だと思ふ。「コスモスの花」の第二
句「花は咲き初め」は語法の上から「花咲き初め」
と聞かせる下と上を関係づけなければならぬ。作者はそ
の関係を意識して下と上を関係づけなければならぬ。
と微妙な注意を拂はねばならぬと思ふ。

明るき秋

久保徹夫

「うん、かうして開墾して
果樹園でもつくつて置けば
父つあんが働かないでも、
どうにか食つて行けるよ。
それに今年の春は、さよ（民
三の妹）も工場を止めさし
めて、家も淋しいが此處まで
引越して来ることにしやう
と思ふが……」
と、民三が話す（うん）
息子の聲にこたえをやう
と、山田の激しい開墾地
の計画を、信吉さんは、に
こにこうれしやうに笑つ

上海に向つて、就航すべ
き日本郵船の六甲丸が、三
千噸の巨体を岸壁に横たへ
て渡航の人々を待ちつゝ、準
備されて居た。
ルミは護次とも別れて、
一人未だ見ぬ「國際的享樂
街」を「獵奇の巢」と
言つた様に……何れも彼も知
らなかつた以前の二人の様
に朝かに……
さう言つた護次には何か
知らぬ悲しみの裡にも強く意
識したのであつた
「え、ちや待って、ね、妾
仕度をして来るア」
ハイヒールの靴音も軽く
ルミは控室に入つて行つた
暫らして、黒づくめの
洋装に包まれたルミと護次
は、にぎやかなバンドの伴
奏に送られて消えて行つた
街の灯の中へ消えて行つた
「何に――」
「本當に、その青年がルミ
は好きだと云ふ事が判つた
りしたんだね」
「え、それもあるけど――」
「さうかいせめてもの想ひ
消した」
×月×日横濱午前十一時

社會の今日

閑 堂

青い空足袋干しながら
石鹸の、残り香をかぐ
コスモスの花
木庭まつる
兒等の影丘に消えたり
草の花
「護次は護次とも別れて、
一人未だ見ぬ「國際的享樂
街」を「獵奇の巢」と
言つた様に……何れも彼も知
らなかつた以前の二人の様
に朝かに……
さう言つた護次には何か
知らぬ悲しみの裡にも強く意
識したのであつた
「え、ちや待って、ね、妾
仕度をして来るア」
ハイヒールの靴音も軽く
ルミは控室に入つて行つた
暫らして、黒づくめの
洋装に包まれたルミと護次
は、にぎやかなバンドの伴
奏に送られて消えて行つた
街の灯の中へ消えて行つた
「何に――」
「本當に、その青年がルミ
は好きだと云ふ事が判つた
りしたんだね」
「え、それもあるけど――」
「さうかいせめてもの想ひ
消した」
×月×日横濱午前十一時

感傷の秋

キヨナガ

晴れあがつた空
コンコンと湧く白雲
眼をうつれば心すらすら
と昇り
ルリコンベキの空にさ迷
つた
「護次は護次とも別れて、
一人未だ見ぬ「國際的享樂
街」を「獵奇の巢」と
言つた様に……何れも彼も知
らなかつた以前の二人の様
に朝かに……
さう言つた護次には何か
知らぬ悲しみの裡にも強く意
識したのであつた
「え、ちや待って、ね、妾
仕度をして来るア」
ハイヒールの靴音も軽く
ルミは控室に入つて行つた
暫らして、黒づくめの
洋装に包まれたルミと護次
は、にぎやかなバンドの伴
奏に送られて消えて行つた
街の灯の中へ消えて行つた
「何に――」
「本當に、その青年がルミ
は好きだと云ふ事が判つた
りしたんだね」
「え、それもあるけど――」
「さうかいせめてもの想ひ
消した」
×月×日横濱午前十一時



山の怪秘

浪木 眞書

戸隠 山の怪秘
(13) 浪木 眞書
人肉の味 (六)
炭小屋は入口の戸だけだ
が、板張で他はみんな半段で作
つた壁である。一寸覗き込
むわけに行かない。
平七郎は息を殺しながら
大膽にも表の板戸に忍び寄
り、さういふやうな、この方
の女と逢つて、ねつとど
した肌ちやあまらせんか」
人喰の群は盛んに鍋の中
へ箸を突込んで話し合つて
ゐるが、中にはゴロリと横
になつたものもある。
平七郎は、見れば見るほ
ど、むごたらしいこの炭小
屋の情景に憤怒を覚えて來
た。このまゝ構はずにたけ
ば可憐な娘の娘も、魔の
手に斬り殺されることは必
定
さうだ、救ひ出してやれ
平七郎は、断然心に決す
るやう拳を固めて
ドンドン、ドンドン
その板戸を突叩いた。
「誰だ誰だ、今頃歸つて
くる奴はグイー、まむしの六
か……まむしの六なら今開
けてやるぞ」
充分に酔つてゐる一人が
仲間でも歸つたと悟つたも
のか、戸の心脈棒を外す音
が、平七郎は息を詰めた

「護次は護次とも別れて、
一人未だ見ぬ「國際的享樂
街」を「獵奇の巢」と
言つた様に……何れも彼も知
らなかつた以前の二人の様
に朝かに……
さう言つた護次には何か
知らぬ悲しみの裡にも強く意
識したのであつた
「え、ちや待って、ね、妾
仕度をして来るア」
ハイヒールの靴音も軽く
ルミは控室に入つて行つた
暫らして、黒づくめの
洋装に包まれたルミと護次
は、にぎやかなバンドの伴
奏に送られて消えて行つた
街の灯の中へ消えて行つた
「何に――」
「本當に、その青年がルミ
は好きだと云ふ事が判つた
りしたんだね」
「え、それもあるけど――」
「さうかいせめてもの想ひ
消した」
×月×日横濱午前十一時

「護次は護次とも別れて、
一人未だ見ぬ「國際的享樂
街」を「獵奇の巢」と
言つた様に……何れも彼も知
らなかつた以前の二人の様
に朝かに……
さう言つた護次には何か
知らぬ悲しみの裡にも強く意
識したのであつた
「え、ちや待って、ね、妾
仕度をして来るア」
ハイヒールの靴音も軽く
ルミは控室に入つて行つた
暫らして、黒づくめの
洋装に包まれたルミと護次
は、にぎやかなバンドの伴
奏に送られて消えて行つた
街の灯の中へ消えて行つた
「何に――」
「本當に、その青年がルミ
は好きだと云ふ事が判つた
りしたんだね」
「え、それもあるけど――」
「さうかいせめてもの想ひ
消した」
×月×日横濱午前十一時

大藏省允許
無盡蔵
共有 共有
電話 五五九番

毛糸編物講習會
各婦人雜誌推薦のS式高速編物器の講
習會を催します。
會期 十月二十一日ヨリ五日間
會場 大日本編物研究會
松井富美子先生
ハシモトヤ糸店階上
編物器は講習中御貸し致します。講習終了の
方で御希望により編物の御世話致します。
平町 ハシモトヤ糸店
電話 十四番

胃腸病性
胃腸病科
皮膚科
花柳病科
性病科
皮膚科
門 專
院醫科性胃腸材松
(番七〇一電町南町平)

中野齒科醫院
院長 日本齒科 中野 恵次
日本齒科 西川 誠
平町田町(松月堂向) 電話五〇九番

産科
婦人科
午後住宅診
午後往診
入院應需
井坂 醫院
平町田町(元合津醫院跡)
電話五五九番

外科
内臓外科
レントゲン線
備完室病
新川町二七(電四六四)

品質第一
電話二六八番
平牛乳舎
平町・九品寺前

良品廉賣に勝る商略なし
磐城セメント特約代理店
和洋銅物
釜屋商店
磐城國平町五丁目
電話九番 九九番
振替貯金口座東京一〇九五六番
確實敏捷は 命の生命なり

治角 治商店
東京株式取引所 短期取引員
東京市日本橋區兜町一ノ四電路カ(又ハカクテ)
電話(66) 三三三三 三五五五 三三三三 三五五五
公社債、株式現物 賣買
治角 治商店
平町三丁目 大谷時計店裏
電話 七三番

